

# 紛争と飢餓の地での援助を表象する新たな「植民地小説」

## ジョナサン・ファラの『プア・マーシー』分析

大池 真知子

### はじめに

本論は、スコットランドのジョナサン・ファラ (Jonathan Falla) による小説『プア・マーシー』 (*Poor Mercy*) を取り上げる。『プア・マーシー』は、1991年の内戦中のスーダンを舞台にし、国際援助団体の現地チームを率いる英国人におもな視点を置いて、援助の失敗を描く。本論は、先進国がアフリカに行く開発援助の限界を、物語の構造に見出す。まず、帝国と未知なる新世界との出会いを描く「植民地小説」(Boehmer) の系譜に『プア・マーシー』を置く。かつての典型的な植民地小説では、ヨーロッパ人が「未開」の地に冒険に訪れた。現代の植民地小説ともいえる『プア・マーシー』では、ヨーロッパ人は紛争と飢餓の地に援助に訪れる。つづくでは、『プア・マーシー』のテキスト分析を行い、小説が表象する援助の失敗と、小説そのものの失敗について考察する。まず A で、援助団体の現場責任者に焦点を当て、外国人である彼が、現地の人々と人間関係を結ぶことをせず、援助に挫折する構造を論じる。つぎに B では、現地人スタッフの男女に目を向け、二人のロマンスが物語として失敗する構造を論じる。

### 現代の植民地小説としての

### 『プア・マーシー』:

### 紛争と飢餓の地を援助する白人

植民地時代、宗主国の作家は、文明にとって

の他者としてアフリカを表象した。アフリカが物語のなにげない細部として登場することもあるれば、主人公がアフリカに出かけるというかたちで、アフリカが物語の舞台として重要な位置を占めることもあった。後者の代表例が、1899年に発表された『闇の奥』(*Heart of Darkness*)であろう。作者のジョセフ・コンラッド (Joseph Conrad) はポーランド出身で、船員として世界を航海して英語を身につけ、その体験をもとに、異国を舞台にした海洋小説を多く記した。『闇の奥』では、語り手はコンゴ河流域の密林に分け入り、文明と隔絶した地の果てで人間の獣性を知る。自己と文明の深淵を表象したこの古典は、アフリカを闇の奥として野蛮視するその差別性を批判されてもきた (Achebe)。

本論で取り上げるファラはスコットランドの男性作家で、どちらかといえば通俗作家に近い。<sup>(1)</sup>そのような作家を本論で取り上げる理由は、アフリカという地の果てへの旅を描いたコンラッドの系譜にファラをおくことができるからである。

ファラによるエッセイや著作に寄せられた序文などから、以下のようなファラの経歴が浮かび上がる (Falla “What”; Barley)。ファラは看護師でもあり、現在はスコットランドで看護師として働きながら、執筆をしている。これまでに詩集、マレー文学の翻訳、カレン民族の生活記録、小説を出版しただけでなく、紀行文を記し、民俗音楽、開発援助、熱帯医療などについても執筆してきた。また、1983年には「将来有望な

英国劇作家」の一人に選ばれている。しかし、執筆活動以上に目を引くのが、ファラの海外援助の経歴である。彼はジャマイカで生を受け、ケンブリッジ大学でインドネシアの民俗音楽を学んだ後、海外協力隊員としてインドネシアの教育出版に携わり、さらにはウガンダで OXFAM のもと働いた。1986 年から 87 年にかけての数ヶ月間は、ミャンマー／ビルマに潜入し、英国の援助団体のもとで少数民族カレンの医療状況を調査した。その経験をもとに 1991 年、カレンの伝統文化の記録を出版する。またファラは、内戦中のスーダンとネパールで、医療援助団体のリーダーとして活躍した経験も持っている。1992 年のネパールでの活動は、2001 年の小説『青い芥子』(Blue Poppies) に結実し、これはベストセラーとなった。この作品は、中国人民軍がチベットに侵攻した 1950 年、国境の村を舞台にして、スコットランドから来た冒険家と村の未亡人のあいだの悲恋を描く。ファラがスーダンに滞在したのは 1991 年のことであり、それをもとに書かれたのが、本論で取り上げる『プア・マーシー』だ。この作品は、1991 年、内戦と飢餓にあえぐスーダンのダルフル地区を舞台に、国際的な食料援助団体の活動を描くものである。

以上のようなファラの経歴と作品世界から、ファラにコンラッド的な感性を見出すのは間違いではなかろう。先進国は豊かで便利だが、彼らはそこにある種の閉塞感を覚える。そして、アフリカをはじめとする南の国に冒険を求める。かれらにとって、そこでの生活は危険だが魅力にあふれ、厳しい状況のなか自己の限界を試すことで、真の自己に出会うことができるのである。少なくともそのように考えるからこそ、小説の舞台をアフリカに置き、そこで先進国の人間が経験する出来事を描こうとする。彼らは異国で「生命と資金と、さらには意味を使った博打と実験」(Boehmer 13) を行うのである。

問題は、ファラが現代の作家であることだ。コンラッドが活躍した植民地時代と違って、現

代では「未開の奥地」など存在しないし、アフリカは共約不能な他者ではない。そこにあたかも人がいないかのごとく、先進国の人間が自己を発見する舞台装置としてアフリカを専有することは許されない。倫理的に許されないばかりか、そのような描写をしたとしても、リアリティに欠けるであろう。

では、現代のコンラッドは、どのような作品を描きうるのか。ファラが『プア・マーシー』で出した答えは、貧困と紛争の地で行われる開発援助を描くというものだった。『プア・マーシー』は、現代小説らしく視点は複数化されてはいるものの、おもに視点が置かれるのは、作者にもっとも近い人物、すなわち、援助団体を現場で指揮する英国人である。援助団体の現場責任者が主人公だとすれば、現地の悲惨な状況にたいする無力感、現地の文化との葛藤などを、主人公が援助活動をとおして経験し、それによって主人公が新たな認識に達するというのが、ドラマの中心になると予想される。

しかしそうはなっていない。そこでは、援助者と援助を受ける現地の人々とのあいだにドラマが成立していないのである。そしてここに、開発援助という関与の仕方の限界が表れていると本論はとらえる。現代、先進国の人間が外部者としてアフリカと関わる方法のうち、貧乏旅行で訪れるのでもなく、企業の駐在員として滞在するのでもなく、兵士として平和維持活動に参加するのでもなく、NGO の援助活動に携わるというのは、可能なかぎり深く近い関係を現地の人々と育む経験であると思われる。しかし、それをテーマにした物語が成立しないというのは、なにを意味するのか。一般に、われわれが経験から意味を汲み取るのは、物語をつうじてだとしたら、援助の物語が成立しないということは、援助からわれわれが意味を汲み取ることができないのを意味する。援助はわれわれに、そして彼らに、何を与え何を与えないのか。援助の物語はなぜ、そしてどのように失敗するのか。『プア・マーシー』の失敗の構造をこれらの

視点から分析することで、開発援助におけるわれわれと彼らの関係について考察したい。

以下に続く本論では、『プア・マーシー』のテキスト分析をする。まずAで、主人公である現場リーダーのザヴィアー(Xavier)に焦点を当て、外国人援助者である彼が、いかに現地の人々と関係を結びそびれ、援助行為をとおしての葛藤と変容を経験しそびれるのかを分析する。さらにBでは、第二の主人公ともいえる現地人スタッフのモガ(Mogga)とレイラ(Leila)に焦点を当てる。ザヴィアーという外国人を主人公にしては、現地の人を巻き込んだ人間ドラマが成立しないため、ファラは、現地人でもあり援助団体にも属するという中間的な立場にある二人の視点を含みこんで、物語の別の層を作る。そこで語られる二人の悲恋は、しかしながら、物語として成功しているとはいいいがたい。Bでは、その失敗の原因を探る。Aで分析するザヴィアーの失敗は、元援助者であるファラが、援助の限界を示すべく、意図的に起こした失敗だが、Bで分析するモガとレイラの物語は、意図せずして失敗している。前者の失敗が、現地の人々の立場に立って援助をしようとしたザヴィアーの限界を示すのだとしたら、後者の失敗は、現地の人々の視点を取り込んで援助のロマンスを描こうとしたファラの限界を示すともいえる。

### 援助の失敗を語る物語と援助を語るのに失敗する物語： 『プア・マーシー』分析

#### A 外国による援助の限界：ザヴィアー分析

住民と隔たった援助者の立場 『プア・マーシー』の舞台は、1991年、内戦下のスーダンである。ダルフル地区では旱魃が起き、「世界食糧計画」(WFP)が緊急の食糧援助を行うことを検討している。スーダン政府はなかば機能しておらず、ダルフル地区の栄養状態を調査するのは、ロンドンを本部とする国際援助団体「アクシヨ

ン・エージェンシー」に任されている。この援助団体の活動が物語の中心となる。

物語は全知の作者によって三人称で語られるが、何人かの人物は内面から描かれる。英国人でエージェンシーの現場責任者を務めるザヴィアー、現地人助手のモガ、現地人専門家のレイラ、ダルフル地区保安長官のハサン(Hassan)である。ザヴィアーの視点をもっとも作者に近く、主人公ともいえるが、他の三人の生い立ちには読者に想像しにくいいためあって、ザヴィアーよりも詳しく語られもする。基本的には、読者はザヴィアーに視点を置いて、他の重要人物を徐々に知りながら物語を読み進むことになる。

ここで問題にしたいのは、視点人物であるザヴィアーが置かれた立場である。ザヴィアーは38才の英国人。エージェンシーの現場責任者としてダルフルに赴任して2年になる。ザヴィアーの悩みは、一言で言えば中間管理職の悩みである。援助団体は、ドナーの利益と受益者の利益の両方を考慮して活動するが、彼の場合、援助団体の現場リーダーという立場にあって、一方でドナーである援助国政府との関係、他方で部下との関係に悩むのである。彼の世界は、受益者である住民からは隔たっていることに注意したい。まず一方で、援助国政府は自国の余剰作物を援助物資として活用したいため、現場責任者のザヴィアーに援助を要請すると圧力をかける。しかしザヴィアーは、援助が地元の産業に悪影響を及ぼすとして、それに抵抗する。だが結局は、援助国政府に押し切られて、援助の決定が下されてしまう。他方、ザヴィアーの部下のほとんどは、使命感に燃える若いヨーロッパ人で、援助に後ろ向きなザヴィアーにいらだつ。ザヴィアーの意向を無視する形で緊急支援が決定され、エージェンシーが支援物資を住民に配給することになったとき、彼らは歓喜し、ザヴィアーは苦々しく思う。このようにザヴィアーは、一方で上層部と、他方で部下と、二重の葛藤を抱える。問題は、援助をテーマにし

ておきながら、援助を現場で仕切るザヴィアーの葛藤が、援助をされる側の人間とのやり取りをつうじて起きるのではなく、援助をする側の内部の対立として起きることなのである。

しかしそれは、国際援助のしくみに内在する問題であるともいえる。現場の責任者ではあっても、ザヴィアーはほとんどいつも事務所におり、中間管理職的な仕事をする。調査や配給を実際に行うのは、部下の外国人専門家と現地人助手のチームであり、とりわけ最前線で住民と直接やり取りをするのは、現地人助手なのである。その意味で外国人スタッフは、援助の現場では多かれ少なかれ管理職的な立場にあるとも言えるが、とくにザヴィアーの場合、援助する側の調整役としての葛藤が、ドラマ化されて顕著に現れる。その意味で彼の立場は、国際援助の現場での外国人の立場を象徴的に表しているといえる。彼の頭にあるのは、「ワシントンとローマとロンドンがどう思うか」(241)であって、ダルフルの特定の村に住む特定の人物の生活ではない。ザヴィアーのような立場の外国人の援助者が、援助をつうじて住民とのあいだに葛藤を抱えることは、援助の仕組みから言ってありえないのかもしれない。小説はザヴィアー以外にも、熱血漢の若い外国人専門家や現地人助手も援助に挫折させており、援助の限界を十分すぎるほど冷徹に記述している。<sup>(2)</sup>

現地人スタッフおよび現地の役人との機能的な関係 外国人援助者のザヴィアーが、受益者である住民と直接関わるのが困難だとしても、エージェンシーに勤務する現地人スタッフや現地の役人との交流があってもいい。しかし彼は、それすら果たせない。

ザヴィアーがもっとも頼りにする現地人スタッフは、物語の第二の主人公ともいえるモガである。モガは、庶民生活にたいする知識や人間関係にたいする洞察力を持ち合わせており、ザヴィアーをはじめ多くのスタッフの信頼を勝ち得る。しかし問題は、ザヴィアーにとってモガが、人物ではなくエージェンシーの駒として

しか存在しないことだ。このことは、ザヴィアーが、もっとも外国人に親しんでいる現地人とすら人間関係を結べないことを意味する。小説中、エージェンシーに難題が持ち上がると、モガはいつの間にか都合よくそこに居合わせ、解決を図る。しかし彼が、エージェンシーを離れたところでどのように暮らしているのかについては、ほとんどなにも語られない。モガの生活や感情はザヴィアーの関心事ではないし、次節Bで述べるように物語の関心事でもないのである。ザヴィアーの、そして物語の関心事は、エージェンシーの便利屋としてのモガの役割である。

さらにザヴィアーと現地の役人との関係も、たがいが属する組織の枠組みを越えることはない。ザヴィアーは、ダルフル地区保安長官のハサンと、一瞬だが心を通わせる。しかしこの場合も、ハサンの私生活の細部を知った上で、人物として共感したのではなく、彼の置かれている公的な立場に共鳴したということは重要である。一方で、上述したとおり、ザヴィアーの本来の任務は住民の福祉だが、WFPは援助国の利益を優先させて援助を強行する。他方、ハサンの任務はダルフル地区の秩序維持だが、中央政府はダルフル地区が不安定であるほうが同地区を支配しやすいと考え、あえて騒乱の種をまく。ハサンはある日、自分の任務の矛盾をザヴィアーに打ち明け、ザヴィアーは「たがいにたいする同情が深まる」(233)のを感じるのである。しかし問題は、仕事上の打ち明け話をした背後にあるハサンの私情は、彼の生い立ちや現在の生活が物語で描写されることで読者には知らされても、ザヴィアーには明らかにされないし、ザヴィアーはそれを知ろうともしないことだ。ザヴィアーとハサンの共感は、両者ともに、それぞれの所属機関で矛盾した役割遂行を余儀なくされているという、組織内の位置づけをとおしてのものにとどまる。案の定、二人の対峙はこのシーンだけで、これ以上の展開はない。

ザヴィアーの人物造形 このように、ザヴィアーは援助者であるにもかかわらず、援助の受け手である現地の人々と人間関係を紡ぐことができない。しかし小説としては、そのような立場に悩み、葛藤し、悟る人物としてザヴィアーを描き、物語を深めることもできたはずだ。しかしファラはそうしない。ザヴィアーは、そのように悩むに足るだけの複雑な人物造形をされていないのである。視点人物であるにもかかわらず、ザヴィアーには私生活も過去も与えられず、現在勤めるエージェンシーで一定の機能を果たすだけだ。それぞれケニヤとベンガルで軍医を務めたとされる祖父や父から、彼が何を受け継ぎ、何を思って援助の道を志したのかは語られない。本国に家族がいるかどうか不明である。また、現地人も家事使用人として雇っているはずだが、生活の場での彼らとの交流は何も描かれぬ。彼の心を繰り返して去来するのは、19世紀にエジプト軍を率いてスーダンに攻め入った英国人のヒックス(Hicks)だけだ。ザヴィアーはどこからともなく援助の現場に降り立ち、仲間の援助者とだけ立場上の軋轢を抱え、使命を果たせず現場を去る。彼は私人ではなく、あくまでもエージェンシーでの役割をとおしてのみ、現地に存在する。そこで彼は暮らすことはなく、働くのみなのである。このような人物が、他者と深い人間関係を結ぶことはおよそ不可能だといえる。

もう一つの援助の物語『顔なき者』 このようにザヴィアーの人物像について批判するとき、筆者は別の小説を念頭に置き、比較して論じている。ガーナ人のアマ・ダーコ(Amma Darko)による『顔なき者』(Faceless)である。これは、ガーナの地元NGOで働くカブリア(Kabria)が、ストリートチルドレンのフォフォ(Fofo)を援助する物語である。

『プア・マーシー』との最大の違いは、援助する側もされる側もともに、援助活動以外の日常生活の細部をともなって造形されていることだ。小説はまず、フォフォの日常生活の描写から始

まり、つぎの章ではカブリアの一日を描く。それはたとえば、14才のフォフォが、ほかのストリートチルドレンと一緒に酒を飲みながらオールナイトの成人映画を見て、掘っ立て小屋で男女ともに雑魚寝し、裸で目覚める姿であり、ボスに金を巻き上げられ、ギャングにレイプされそうになる姿である。そしてまた、中産階級の住宅地に住むカブリアが、3人の子どもをかかえて家事と育児を独りでこなし、職場と家庭で休む間もなく働く姿であり、出産育児のために学業を途中であきらめたため、夫よりも収入が低く、夫に一方向的に奉仕する姿である。

このように、被援助者のフォフォと援助者のカブリアが置かれた環境はまったく違うが、女性差別という点での共通点もはっきりしており、両者は、社会のまったく別の階層に属しているながらも、一つの社会を構成してもいることが強調される。そして物語が進行するにつれ、両者が出会うことで、社会に新たな領域が生まれる。たとえばカブリアは、15才の娘の部屋で性教育のパンフレットを目にし、そこで使われているピア・エデュケーションという方法をストリートチルドレンのエンパワーメントにも応用できると思いつく。このように『顔なき者』は、援助する側とされる側を日常をふくめて描写し、両者の交流を描くことで、両者が属している社会全体を立体的に表象することに成功するのである。

意図された失敗 以上の分析からいえるのは、外国人の援助者を主人公とする物語としては、『プア・マーシー』はあまりに期待はずれということだ。援助を扱う小説で、しかも出版当事メディアをにぎわせていたダルフールを舞台にしていると聞けば、先進国の読者が期待するのは、外部者のわれわれがアフリカの複雑な問題に関わりうるのかを、ドラマ化した形で問う物語であるはずだ。外国人の援助者に視点を置き、彼が現地の住民に関与することをとおして、現地の住民がかかえるジェンダー、階級、宗教、民族の葛藤を、外国人という立場から追体験す

る。これが読者の期待のはずだ。しかしそれは見事に裏切られ、われわれは外国人援助者の世界から一步も出ることなく、したがって現地の人々の生活を眼にすることはない。

しかし、読者の期待の裏切りは、ファラが意図したものだったともいえる。外国人として実際に援助に携わった者として、ファラは、援助の構造的な矛盾を知っているはずだ (Falla "What"; Falla Review)。外国人の援助者に視点をおくかぎり、援助という枠組みで外部者がアフリカと関わること自体の限界に拘束され、物語の展開は望めず、読者が求めるようなドラマは成立し得ないと示すこと、すなわち、外国による援助の無意味さを示すことこそ、彼の意図だったのではないか。

だが、援助に幻滅する元援助者のファラは、援助をネタに物語を書く流行作家でもある。この立場は、『プア・マーシー』の前書きでも表明されている。彼は、繰り返される飢饉にたいし有効な援助ができない苦々しさを語った後、イヴリン・ウォー (Evelyn Waugh) の「物語はたんなる読み物でしかない」[x] という警句を引いて、自分が小説家として「きわめて自由に」[x] 脚色したことを弁護するのである。援助の物語を小説として成立させるために、ファラがとった方策とは、すなわち、外国人ザヴィアーから現地人スタッフのモガとレイラに中心を移し、彼らにドラマを振付けることだった。その結果『プア・マーシー』は、一方で、ザヴィアーを語りにもっとも近い視点として持ち、ザヴィアーの物語を成立させないことをつうじて、援助の仕組みがかかえる限界を示しながらも、他方で、援助の場でモガとレイラに恋愛をさせてドラマを盛り上げ、援助に携わる人間の内側を描くという離れ技を行う。後者の試みは成功するのだろうか。

## B 現地人による援助ロマンスの試み:モガとレイラ分析

物語の構成 物語の複数の層を理解するため、ここで物語の構成を説明しよう。小説は5部からなる。1部「やけどした手」では、エージェンシーの活動状況が明らかにされ、主要な人物が登場し、物語のセッティングがされる。エージェンシーを取り巻く村の雰囲気、現地人の雑用係や、モガの前任者にあたる現地人助手とその妻といったマージナルな関係者を点描することで、浮かび上がる。とはいえ、物語の大前提となるエージェンシーの活動を読者に知らせることが第1部の目的であり、それはザヴィアーの視点からなされるため、読者はほぼザヴィアーの視点を支配的な位置に置きながら第1部を読み進めることになる。第2部「モガとレイラ」は、一転してモガとレイラが中心となる。二人がエージェンシーに来るまでのそれぞれの過去が語られた後、両者がエージェンシーではじめて一緒にする仕事が語られる。こうして二人はかなりの細部をともなって紹介され、ザヴィアーにつぐ重要人物として前景化される。第3部「われらのモガ」は、ふたたびザヴィアーの世界に戻り、彼ら外国人スタッフが困難に直面し、モガがそれらをうまく解決する様子が語られる。モガに物語の重心が置かれはするが、視点はほとんどザヴィアーや部下の外国人にあり、彼らの目をとおしてモガの献身ぶりが描かれる。第4部「ハサン」は視点が移動し、これまで背景にいた保安長官のハサンが前景化される。1章でハサンの生い立ちが語られ、3章で彼の視点から、ダルフルと中央政府との対立が語られる。あいだの2章はハサンの視点からいったん離れ、モガとレイラの関係が深まる様が語られる。最後の第5部「遊牧民」は、ザヴィアーと部下の外国人の世界、そしてモガとレイラの世界という二つの世界からなる。一方でザヴィアーは、エージェンシーの撤退を決定する。他方モガとレイラは、この決定を知らず奥地で

仕事を続け、二人のロマンスが展開する。最後にモガが独り奥地に残り、何者かに殺される。以上が物語のおおまかな構成である。

物語の中心が、ザヴィアーの空しい援助からモガとレイラの美しい恋愛に移動するのは、3部の2章の一場面である。ここでザヴィアーは、同僚のローズ(Rose)に父の思い出とローズへのそこはかたない好意を語り、ザヴィアーの内面が例外的に前景化される。しかしそれは一瞬のことで、これ以上ドラマとして深まることはなく、「なにかが二人のあいだにただよった」(171)かと思うと、すぐさま二人の視線は移動し、モガとレイラの姿を遠景に認める。そして「二人[モガとレイラ]は本当に仲がいいな」(171)とのザヴィアーの言葉で、物語はつぎに、モガとレイラの会話をたどり始める。ともに英国人であるザヴィアーとローズが、旧植民地を援助する限界について語っていたのにたいし、スーダン人のモガとレイラは、将来自分たちがスーダンのために尽くすという希望について語る。すなわち、ダルフルでは、飢饉のときに雑草を食べるといふ知恵が女たちのあいだに伝わっており、農学者のレイラは、その知恵が失われないうちに記録し、本にしたいと口にする。それにたいしモガも、ダルフルが秘める豊穡に魅せられ、レイラの計画に協力を申し出る。後述するように、レイラはエリートの女として、モガは少数民族としての疎外を抱えており、この計画は二人が共同でそれぞれの疎外を乗り越えることを象徴する。二人は「ひそかにたくらみごとをする幼子」(173)のように「寄り添い、何ごとかに熱中」(173)し、それをダルフルの大自然が「見つめ」(173)る。こうして小説は、ザヴィアーら外国人援助者の絶望から、モガら現地人援助者の希望へと焦点を移動させ、モガとレイラの恋愛を語ることで、物語をドラマとして成立させようとするのである。現地人だが外部者のモガとレイラ モガとレイラが恋愛ドラマの主演に抜擢されるには理由がある。二人は、ともにエージェンシーの現地人

スタッフなのだが、つぎに述べるように、地元ダルフルの人間にとっては異端者であり、外部者としての立場も保持している。その意味で、物語の目的 ザヴィアーに代わって、受益者である住民との葛藤を援助の現場で経験し、ドラマを展開する にぴったりなのである。

二人の異端者としての造形をそれぞれ見てみよう。まずモガであるが、地元ダルフルの人間にとって、彼は人種的、文化的なよそ者である。人種的にいうと、彼はダルフルから遠く離れたスーダン南部の出身で、体格はずんぐりしており、色も黒い。これらの特徴のため、ダルフルではすぐに、南部の黒人として目を引く。また、文化的にもモガは異端者である。ダルフルはアラブ系と非アラブ系が混在してはいるもののアラブ系が支配的である。たいするモガは、非アラブ系の少数民族出身である。彼は小学校教師の家に生まれ、自身もヨーロッパの支援を受けた職業訓練校の校長になる。このようにモガは、世俗的な背景を持っており、イスラム教徒ではもちろんない。さらに、ダルフルで彼がレイラと親しくしたり、セックスワーカーが下宿しているような密造酒販売所に住んだりしていることも、イスラムの道徳に反することとみなされ、彼の異端者としての立場を強める結果となっている。

またレイラであるが、彼女は都会育ちのエリートであること、女だてらに専門職を持っていること、夫が反体制派であること、そして現在は女独りで暮らしていることなどにより異端視される。彼女は首都ハルツーム郊外の中産階級に生まれた。リベラルな父に薫陶を受け、自立志向を持つようになる。大学院生の頃に知り合った大学講師と結婚し、やがてみずからも大学で教鞭をとるようになる。夫がダルフルの大学総長に就任すると、彼女もダルフルに移って研究を続ける。だが夫が反体制派とみなされて拘禁され、そのために自身も研究プロジェクトからはずされたため、エージェンシーに農学者として職を得る。

変化しない人物 こうして物語のごく早い段階で、モガとレイラは、現地人だが外部者であるという位置づけがなされ、ザヴィアーの代役で援助活動のドラマの主役を演じるに足る人物として、読者に提示される。しかし問題は、二人の援助活動が、それぞれの生活全体に組み込まれた形で描かれないことだ。なるほどエージェンシーに職を得るまでのいきさつは、上述のとおり詳しく書かれる。しかしそれぞれの過去は、現在の活動と関連付けられることはほとんどない。さらに、現在の私生活についてもほとんど描かれず、活動をつうじて二人がなにを新たに経験し、二人の生活がどう変化したかも描かれないため、二人の人物像は平板なままで活動をつうじて立体化されることはない。

小説の構造にも、この問題は反映されている。2部でモガとレイラそれぞれに視点を置き、1章ずつをさいて過去を詳しく紹介しながら、3部ではふたたび、ザヴィアーと部下の外国人に視点が戻り、彼らの目から見たモガの働きぶりが描かれる。もし2部に続いて3部も、モガに視点を置いて、彼の立場からエージェンシーの仕事が描かれていれば、2部で明らかにされた彼の個人史が、彼の現在の活動のなかでさらに展開されただろう。しかしそうはなっていない。2部のタイトルが「モガとレイラ」であるのにたいし、3部は「われら [外国人スタッフ] のモガ」となっているのは、それを象徴的にあらわしている。

もちろん、援助者としての二人の内面が小説でまったく描かれないわけではない。しかしそれが、二人の人物設定から有機的に展開されていないため、説得力に欠ける。それぞれ一つずつ例を挙げよう。

まずモガだが、4部の2章でモガとレイラの活動に焦点が当たったときにはじめて、彼は、エージェンシーで活動する自分が民族的に難しい立場にあると意識するが、この気づきは彼の知性からして遅すぎるように思われ、説得力がない。モガは役所の図書室でたまたま、英国人

が書いた1922年発行の『スーダンのアラブ史』を手にする。その本を読み、「英国人がこの国の人々について、ここまであからさまに無礼なもの言い方をしている」(208)のに衝撃を受け、さらに「自分もそれに同意しているのに気づく」(210)く。そして、自分の活動にたいする自負は「虚栄心」(211)でしかないと自覚し、エージェンシーのスタッフも偽善的に感じ、彼らの「道具」(212)となっている自分に嫌気がさす。

英国人は自分たちの手に負えない問題を私に処理させる。私は前線の兵士で、仲介人・・・だ。スーダン人には南部人としてさげすまれる。私は高貴なアラブ人ではないし、[非アラブ系だとしても] まともなフル人やザガウェ人ですらなく、[アラブ系の] 彼らにとってはなんとか人間の部類に入るかどうかだ。しかし外国人がへまをやらかせば、私はスーダン人として母国への裏切りを非難される立場なんだ。(212)

モガの自覚はたしかに正しいが、あまりに遅すぎないだろうか。読者は、モガがここで気づく以前に、ザヴィアーの視点から先進国の偽善について教えられているし、モガが便利屋として扱われていることも、外国人スタッフの視点に立ってすでに実感済みである。モガはそれにこれまで気づかなかっただろうか。しかもそれを、1922年に発行されたほこりまみれの古書によって自覚するとは、モガにしては愚鈍に過ぎる。これまでのさまざまなエピソードは、モガを、卓越した洞察力でもってエージェンシーの難題を解決する知恵者として描いてきた。そのように設定された人物が、援助活動の矛盾を20世紀初頭の英国人の文章によっていまさらのように自覚するのは、リアリティーに欠ける。

つぎにレイラだが、彼女は自立したフェミニストのはずなのに、活動中、モガにレディー扱いされて喜ぶ姿は、それにまったくそぐわない。彼女は姉と二人姉妹で、男児に恵まれなかった



父は、姉妹を男なみに育てようとする。姉のほうは専業主婦になるが、妹のレイラは大学院にまで進み、結婚後も専門職を続ける。このように、レイラは自立した女として設定されているにもかかわらず、エージェンシーでの活動中はそれが影を潜める。彼女は農業の専門家で、助手のモガらとチームを組んで行動する。そのような時、しばしば彼女は紅一点になり、チームリーダーでありながらも女として保護される立場になる。そのような扱いにたいし彼女は、自分の思想的な立場と何の矛盾も感じないどころか、普段女として甘んじている二級市民扱いを補い、自尊心を取り戻してくれるものとして歓迎するのである。たとえば活動中、チームの車が目的地に着くと、モガはさっとドアを開け、レイラは「優雅に車から降りたち、トープをささっと払ってしわをのばす」(126)、この「女王のような」(130)扱いは、車を降りるたびに繰り返される。現地の警官にレイラが独りで対峙しなければならないとき、彼女は「モガがいてくれたら」(131)と切望する。するとモガが役人を連れて現れ、ようやく警官は彼女に敬意を払うようになる。夜、キャンプをするとき、モガらは快適で安全な寝床を彼女に譲り、彼女は「王女様のように」(132)寝かせてもらう。このようにモガがレイラを守るという関係は、5部で両者が奥地に派遣されるときも同様であり、それを嬉々として受け入れるレイラの姿は、彼女のフェミニストとしての設定と大きく矛盾する。作者ファラは、エピソードとして説明する程度なら、女をフェミニストとして造形できるが、物語の展開のなかでフェミニストとして考え、行動するような女の人物を描くことができていないのである。

盛り上がれない終局 これまで見てきたように、モガとレイラの人物造形は甘い。繰り返しになるが、二人はそれぞれ民族とジェンダーの面で、葛藤を抱える人物として2部で設定されるにもかかわらず、この葛藤は設定の域を出ず、後に続く物語のなかで展開されないからだ。そのた

め、物語の最後、5部で展開される二人のロマンスモリアルさに欠け、読者は二人の感情の盛り上がりについていけない。

5部のあらすじを追ってみよう。5部では、エージェンシーが住民に配給した薬が期限切れだったため、それを回収するためにモガが奥地に派遣される。回収の仕事は、保安官のハサンが要求した名目上のもので、ハサンの真のねらいは、奥地での軍の違法行為を撮影させることにあった。さらにハサンは、夫の釈放と引き換えに、レイラも一緒に行かせる。ハサンは、自分の任務である治安維持を脅かす軍と、自分の権威に挑戦するモガとレイラに制裁を加えたいと考えており、二人にこの危険な仕事をさせることで一石二鳥を狙うのである。他方、エージェンシーに反感を持つある地元有力者は、ハサンの策略に乗じてモガを殺そうとたくらみ、案内役を装った刺客を派遣する。モガはレイラに、この機会にかねてから二人で話していた植生の調査を行おうと提案し、二人はともに、荒れた砂漠の道なき道を通って奥地への旅を続ける。しかし安全のため、途中でレイラだけが引き返し、モガは刺客と残される。そして砂漠の真ん中で刺客に置き去りにされ、モガはさまよい、遊牧民に狙撃されて死ぬ。

以上のような5部のあらすじを読んだだけでも、このエピソードの荒唐無稽さが際立つのではないだろうか。あれほどまでに洞察力が鋭かったモガは、しかけられた罠に気づかず、不合理なまでに奥地での回収作業に固執する。モガの運転手は案内役の様子に疑念を抱き、回収作業は自殺行為だとたしなめるが、モガは聞き入れない。また、レイラはモガに惹かれているはずだが、ハサンの策略をモガに教えない。それではレイラはハサンの側にいるのかといえば、そうでもなく、ハサンが託したカメラを置き忘れる。そして二人は、最悪の治安と気候をものともせず、植生の調査を口実にして、奥地への旅というロマンスを遂行する。それは明らかに破局へ向かう旅である。小説は、これまで二人

の関係を、そのような破滅的な選択をするに足るだけ深めていないため、読者にはただ荒唐無稽に響く。物語の終わり近く、砂漠に残されたモガは、見ず知らずの遊牧民に意味もなく殺され、一方、自宅に戻ったレイラは、ハサンにレイプされそうになって彼を刺し殺す。両者の悲劇には、必然性が感じられない。

外国人のザヴィアーから現地人のモガとレイラへ主役を交代させ、援助をテーマにしたドラマを成立させようとしたファラの試みは、こうして、人物造形としてもプロットとしても失敗に終わる。わたしたち読者は、紛争と飢餓に苦しむ住民の姿を目にすることなく、外国人援助者の内輪の葛藤と、現地の援助協力者のありそもないロマンスを読まされた結果、アフリカを再他者化する以外、この援助の物語から何も得られずに終わる。物語における援助の失敗と援助の物語化の失敗は、援助という枠組みをとおして、われわれ外部者がアフリカの人々と対等な関係を結び得ないかもしれないこと、そして援助を描く物語が、かつての植民地小説と同様に、アフリカを専有してしまいかねないことを警告する。

## まとめ

本論が分析した『プア・マーシー』は、国際援助団体がその使命を果たせずに終わる物語である。本論では、『プア・マーシー』を植民地小説の系譜に位置づけた。コンラッドの『闇の奥』など、植民地時代の植民地小説は、ヨーロッパ人が「未開」の地としてのアフリカに冒険を求めて赴き、そこで真の自己に出会う物語だった。現代の植民地小説ともいえる『プア・マーシー』では、ヨーロッパ人は内戦と飢餓の地としてのアフリカに援助に訪れる。しかし本論のAで明らかにしたように、外国人の援助者を主人公とするかぎり、援助の構造的な矛盾に阻まれ、援助者と現地の人々との人間関係のドラマは生まれぬ。元援助関係者である作者は、こうし

てドラマを失敗に終わらせることにより、援助の不可能性をリアリスティックに表象したともいえる。だが流行作家である彼は、援助をめぐるロマンスをあきらめることはできず、援助団体に勤める現地人という中間的な視点を借りることで、ドラマを作ろうとした。しかし本論のBで指摘したように、現地人スタッフの二人の悲恋物語は、人物造形の点でもプロット展開の点でも説得力に欠け、けっきょく失敗する。このように『プア・マーシー』が語る援助の物語は、二重に失敗し、われわれが援助をつうじてアフリカに関わる困難と、われわれが援助の物語をとおしてアフリカを表象する困難とを示すのである。

## 註

- (1) 「現代言語協会文献目録」(Modern Language Association Bibliography)は、英語圏文学研究分野のもっとも包括的な文献目録だが、ファラにかんする論文は一件もない。また総合的な文献目録である「学術検索エリート」(Academic Search Elite)は、ファラの作品の書評やファラによる論評を含むのみである。このことから、本論はファラを通俗作家と位置づける。
- (2) トビー(Toby)は、援助の理想に燃えるアフリカ系英国人の若者で、任地に「恋をし」(165)で「受け入れられたいと切望」(165)する。しかし外国人として不審と好奇の目を向けられ、体調も崩し、仕事でもミスを犯し、任地を去る。また、地元ダルフール出身の助手マリク(Malik)も、住民から外国人の手先として敵視される。住民は「外国の食糧、外国の援助、外国政府をはじめ政府そのもの、マリクのような大卒の青二才と彼らの口約束にたいする軽蔑」(175)をあらわにする。マリクが配給した種は現地にはなじみがなく、住民は受け入れない。マリクが「頭を使って育て」(179)ると主張すると、住民はそれを「侮辱」(179)ととり、両者は決裂する。
- (3) 彼女のフェミニスト的な自己の原風景には、「女

子割礼」がある。リベラルな父は「女子割礼」に反対していたが、母は姉の性器をこっそり切除する。そのときの姉の鮮血をレイラは克明に覚えており、のちにレイブされそうになってハサンを殺したとき、両者の流血が重なる。また母は、姉の数年後レイラも切除するが、そのときは合併症によりレイラは医者のお世話にまでなる。

### 参考文献

- Achebe, Chinua. "An Image of Africa: Racism in Conrad's *Heart of Darkness*." *Massachusetts Review* 18.4 (1977). Rpt in *Hopes and Impediments: Selected Essays 1965-1987*. London: Heinemann, 1988. 1-13.
- Barley, Nigel. Foreword. *True Love and Bartholomew: Rebels on the Burmese Border*. By Jonathan Falla. Cambridge: Cambridge UP, 1991. xi-xiii.
- Boehmer, Elleke. *Colonial and Postcolonial Literature: Migrant Metaphors*. Oxford: Oxford UP, 1995.
- Conrad, Joseph. *Heart of Darkness*. 1899. Ed. Robert Kimbrough. Norton Critical Edition. 3<sup>rd</sup> ed. New York and London: Norton, 1988.
- Darko, Amma. *Faceless*. 2003. Rev. ed. Accra, Ghana: Sub-Sahara, 2004.
- Falla, Jonathan. *Blue Poppies*. Glasgow: Neil Wilson, 2001.
- . *Poor Mercy: A Novel*. Edinburgh: Polygon-Birlinn, 2005.
- . Rev. of *World in Crisis: The Politics of Survival at the End of the 20<sup>th</sup> Century*. Eds. Julia Groenewold and Eve Porter. *International Journal of Children's Rights* 6.1 (1988): 118-21.
- . *True Love and Bartholomew: Rebels on the Burmese Border*. Cambridge: Cambridge UP, 1991.
- . "What do they Think they are Doing? The Confusion of Aid Workers and their 'Fantastic Invasion' of the Underdeveloped World." *Times Literary Supplement* 1997 July 18: 15-6.

## A New “Colonial Novel” Representing Aid in Conflict and Famine: An Analysis of *Poor Mercy* by Jonathan Falla

OIKE Machiko

The present paper analyzes a novel, *Poor Mercy*, by a Scottish novelist Jonathan Falla, in which an international aid agency struggles without success to save people in Sudan at a time of civil war and famine. Through a textual analysis of the novel, the paper demonstrates how the limitation of aid work for Africa is dramatized in its narrative.

The first part of the paper places the novel as a new version of the old “colonial novel,” which writes about an often one-sided encounter between the colonizer and the colonized. In old colonial novels such as *Heart of Darkness* by Joseph Conrad, the European protagonist is fascinated with, ventures into, and imposes interpretation over, the unknown, while in a modern version like *Poor Mercy*, most often he, but sometimes she, sacrifices him/herself for an aid work in the land of war and conflict, and sickness and famine.

The second part analyzes the text of *Poor Mercy*, and shows how it represents the failure of aid work and how it fails to create a romance from aid. First, the paper focuses on a British field leader in charge of aid work in Darfur, Sudan, and considers how he fails to relate himself to the people and therefore save them. Then, the paper turns its focus on two Sudanese aid workers, one being a black minority male assistant, and the other being an elite Arab female agriculturalist, and shows how their unlikely romance fails as a story.

The paper concludes by arguing that through representing the failure of aid and failing to narrate a story of aid, the text warns us that we will not be able to relate ourselves to the people in Africa through channels of aid, and that the story of aid will end in re-appropriating Africa and its people in the same way as the old colonial novel did.